

IV層中に、ラミナ状あるいは1~2cm大の小ブロック状にやや粘性のあるⅢ層を混在させる。出土遺物は弥生土器2点。うち1点が4で、壺口縁部。端部を上下に若干拡張し、3条の凹線文を施す。中期後葉。

SP-12は、SP-9に西側を切られ、東側は調査区東壁にかかる長楕円形の柱穴。深さは約15cm。埋土は暗褐色の均質な砂質土で、やや粘性の高いⅢ層をラミナ状に含み、Ⅲ-3層に比べてⅣ層ブロックの混在が少ない。出土遺物は5(R1)のみ。弥生土器の鉢で、底部は小さな凸状と推測される。後期中葉から後葉。

SR-5は、Ⅲ層を切る砂礫を多く含む流路内堆積。

トレンチ内がこの流路のちょうど北岸にあたり、南岸は不明。SR-5埋土は灰黄褐色砂質土で、1~10mm大の砂粒・砂礫を多く含み、10cm大の石も少量含む。また下層に均質な砂質土をラミナ状に含み、しまりがややある。出土遺物は50点程度を数え、多くは弥生土器ないしは土師器片であるが、須恵器も確実に含む。図化できたのは19~21の3点。19は弥生土器壺底部。20・21は須恵器。20は壺蓋体部で後が残る。6世紀前葉から中葉。21は壺胴部片。SR-5は古墳時代の後期以降に埋没することが窺える。

遺構出土で取り上げた遺物は少ないが、Ⅲ層出土と

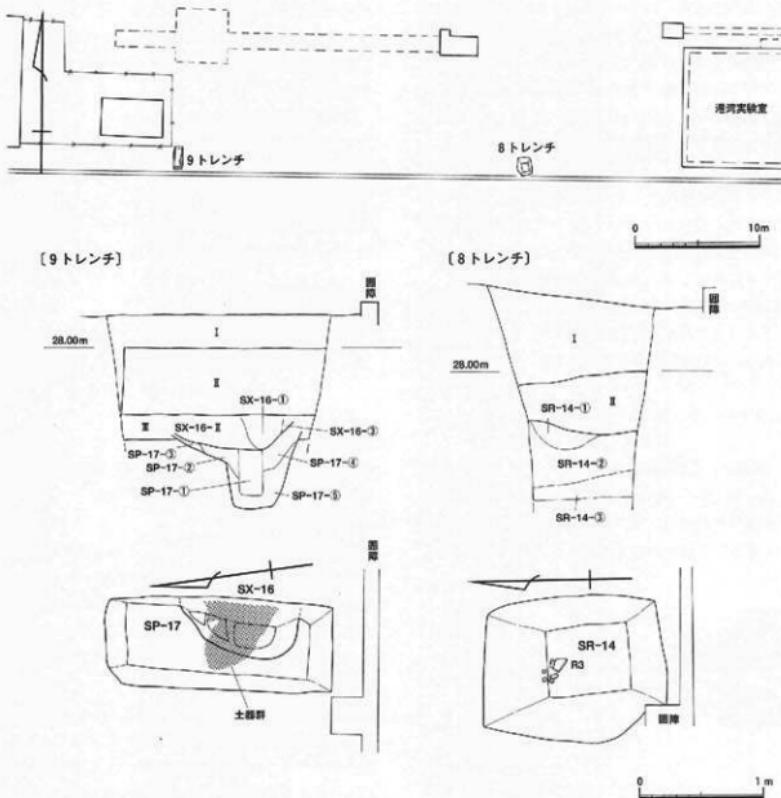


図128 8・9トレンチ位置図・実測図(縮尺1/400、1/40)

した遺物は比較的多い。6~18の13点が図化できた。6~8は弥生土器の壺口縁部である。6は端部を上下に若干拡張し、浅い凹線文を2条施す。頸部が直立する形態と推定でき、後期初頭。7は口縁を上下に拡張し、端部に凹線文2条を施す。中期後葉。8は短頸壺口縁部で、口縁下端が若干肥厚する。後期前葉。9は壺底部。器壁は薄く、肩の張りが弱い。短頸壺とみられ、後期前葉。10は外面にクシ描波状文・直線文を施文しており、複合口縁壺口縁部とみられる。かなり器壁が薄く、内面は剥離面の可能性も残る。後期中葉から後葉。11は壺底部。12~16は弥生土器の口縁部。12~13は、横ナデにより口縁上端部をつまみ上げる。いずれも中期後葉。14はやや内湾する口縁部。15はやや大型。後期中葉から後葉。16は緩やかに長く外反する。後期中葉から後葉。17~18は高杯。17は内側に断面三角形の突帯を貼り付け、外側稜部に刻みを施す口縁部。中期中葉。18は脚部。外面に縱方向のミガキと横ナデ、内面にシボリ痕が見られ、接合部に近いことが窺える。後期か。

22~25は擾乱層出土。22・23は弥生土器。22は壺上胴部で、板小口を用いた太い「ノ」字状押圧文が認められる。中期後葉。23は壺頸部で、突帶を貼り付け、斜格子状に押圧を加える。複合口縁壺の可能性が高く、後期中葉から後葉。24は須恵器底底部。残存範囲は回転ヘラケズリが及ぶ。25は器台形のミニチュア土器か。蓋形あるいは高杯形の可能性もある。【吉田・山田】

(8) 8トレンチ (図128・129、

図版38-5・6・40-10)

工学部港湾実験施設南西に設置したトレンチである。長さ約1.5m・幅約1.2mを呈する。I層が現地表下約60cmまで続き、II層は30~50cmの厚さで堆積し、下部に鉄分の沈着が認められる。

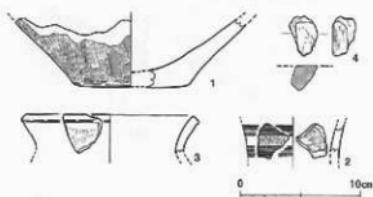


図129 8トレンチ出土遺物実測図 (縮尺1/4)

標高28.00m以下は流路内堆積となり、この流路をSR-14とした。狭いトレンチ調査のため、標高27.00m前後まで作業を中止し、最終底面については不明であるが、底面まで遺物をほとんど含まない砂塵層が続いていると想定する。確認した範囲のSR-14埋土は4層に分けられる。①層は灰黄色砂質土で、砂礫を大量に含む。②層はにぶい黄褐色砂質シルトを主体しながら、灰黃褐色砂質土のブロックを含み、弥生土器片を多く含む。③層は灰黄色砂質土で、遺物はごく少量しか含まない。④層は灰白色砂質土で、製造先大の円礫を含み、遺物は見あたらない。

SR-14からは比較的多くの土器が出土しており、いずれも弥生土器である。特に②層下部を掘り下げ中、トレンチ北側部分で、弥生土器片が集中して出土しているが、接合関係は見られず、一括投棄したようなものではない。

SR-14出土遺物から4点を図化した。1 (R3) は②層下部出土の、平底の壺底部。中期後葉か。2は①層出土の長頸壺頸部。縱方向の細かいミガキの後に、クシ描直線文を2帯施す。後期後葉。3も①層出土の壺口縁部。後期前葉から中葉。4は②層上部出土の被然粘土塊。指頭圧痕を残す表面が一部残り、破損面にはスサ痕が窺える。以上から、SR-14の埋没は、弥生時代後期後葉を想定できることになる。【三吉・山田】

(9) 9トレンチ (図128・130~133、

図版39-1~4・41~43)

工学部2号館の南西に設置したトレンチである。南北長約1.8m・東西幅約0.8mを測る。トレンチ内の大部分は地表下約30cmまでI層が続き、北壁近くでは現地表下80cm近くまで擾乱が及ぶ。I層下にはII層が約60cmの厚さで堆積する。

その直下、標高約27.50mで、1mm前後の砂粒を少量含む灰黃褐色砂質シルトのIII層を検出した。また、検出と共に、大量の弥生土器群があらわれた。弥生土器群はトレンチ中央、幅約50cmで北西から南東の方向に土器片が折り重なりながら流れ落ちるような状況で検出され、土器群の傾斜と重なり具合などから、北西側から南東方向に向かって投棄したものと考えられる。土器群除去後、遺構検出を行うと同時に、東西両壁の精査から、大量の弥生土器群は土器溜まりを形成していたことが判明し、これをSX-16とした。SX-16は、後述するSP-17埋没後に形成された落ち込み状の

造構であるという以外、明確な形状については確認できていない。埋土は3層に分けることができる。①層は、灰黄褐色砂質シルトを主体として、明黄褐色砂質土の丸いブロックと、小指先大の円窪、炭化物を含む。②層は①層とほぼ同じ土質ながら、明黄褐色砂質土ブロックは①層に比べて少なく、親指先大の円窪を含む。土器群直下には薄い炭層が面的に広がる。③層は灰黄褐色砂質シルトで、明黄褐色砂質土のブロックを含まない。

SX-16の下層には、明らかに埋土の状況が異なる遺構が存在する。SP-17である。SP-17は、トレレンチ東壁に沿って隅丸長方形の平面プランを確認し、残り半分は調査区外へと続く。掘り方は1辺約1m、柱痕径約20cmを測る。埋土は5層に分層できる。①層は柱痕部である。灰黄褐色砂質土で、小指先大の炭化物ブロックを含み、砂礫は含まない。後記する②～⑤層に比べて、またSX-16埋土に比べて圧倒的に粘性が高い。②～⑤層は柱を支えるために強固に突き固められ、しまりの強い土層である。②層は灰黄褐色砂質土で、砂礫は含まないが、砂質が強い。明黄褐色砂質土の丸いブロックが約半分を占める。③層は②層とほぼ同じ土質で、明黄褐色砂質土の割合が高い。④層は、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックと灰黄褐色砂質土をほぼ同じ割合で混在させ、砂礫は含まないが、砂質が強い。⑤層は灰黄褐色砂質土を主体とし、灰黄色砂質土のブロックを含む。親指先大の円窪を含み、炭化物は含まない。出土土器は、いずれも押しつぶされた小片である。

狭い範囲にもかかわらず、9トレレンチにおいては大量の遺物の出土を得て、49点が図化できた。取り上げ時にはⅢ層・SX-16上層上部・同上層下部・同下層に分けたものの、接合時には、その間で接合関係が頻繁に認められた。1～41が、接合分も含めて、SX-16出土とできるものである。なお他に、42～44がⅢ層上土、45～49が擾乱層出土である。

1～41の内、40・41の石器を除いた土器は、いずれも弥生土器であり、しかも基本的に中期後葉の土器で、田崎（2004）の指摘する焼成破裂土器片などの土器焼成失敗品を多数含む。

1～28は壺。1は大型壺の口頸部で、口縁端部を上下に拡張し、6条の凹線文が巡る。また頸部には、幅広の低平な突帯を貼り付け、板小口で密に押圧を施す。口縁部に焼成破裂痕があり、これに接合する焼成破裂

土器片もある。破裂土器片は、中央部が厚く端部は薄い。また、焼成破裂痕と焼成破裂土器片表面は、他の器體と同様の色調に焼き上がっている。

2～6は、口縁部に凹線文、胴上半部に板小口を用いた「ノ」字状押圧文を施す同型式の壺。2～3は口縁部片であるが、凹線文部や頸部破断部に焼成破裂痕が連なって認められ、4には薄い黒斑を生じた破片と通常の破片が接合した焼成時破損I種dが認められる。また、3は全体に赤く、焼きが良くない。5・6は上半部が残る。5は体部外面に焼成破裂痕があり、焼成時破損I種c～eも認められ、モザイク状の外観を呈する。6も焼成破裂痕が認められる。

7～11は板小口を用いた「ノ」字状押圧文が残る頸部。なで肩の形態の7～10と、肩の張る11の別があるが、基本的に先の2～6と同型式の壺である。7は、下端破断部に焼成破裂痕の一端が見られる。8は全体に焼成が不良で、下半は外表面のみが残る焼成破裂上器片である。9も赤焼けで焼成不良。10は内外面に焼成破裂痕を確認できる。11は、焼成破裂痕が内外面にあり、黒斑・黒変の有無による明確さは欠くが、内外面ともに色調の異なる破片の接合がある。

12・13は頸部に幅広のB種凹線文をもつ壺体。12は頸部凹線文部のみだが、外面の大きな剥落は、焼成破裂痕の可能性が高い。13は焼成破裂痕及びこれに接合する破裂土器片があり、接合部分で黒斑が途切れる焼成時破損I種dも認められる。14は頸部に細い凹線文を施すが、その幅は狭く沈線風で、頸部周辺はむしろ段状を呈する。外面のミガキも丁寧。黒斑が土器の破損面まで及ぶ焼成時破損I種eが認められる。

15は肩の張りの弱い副部。焼成破裂痕があり、やや赤焼け気味である。16～29は体部下半ないし底部。外面を縱方向のミガキ、内面ケズリを行う。16は最大径部以下が残り、頸部最大径部に「ノ」字状押圧文を加える。やや赤焼け気味で焼成は良くなく、復元・接合部分で黒斑が途切れる焼成時破損I種dが認められる。17は傾斜がやや急で壺の可能性もあるが、調整は共通する。18は焼成不良で全体的に赤みを帯び、焼成破裂痕が外面に認められる。19は頸部上半から底部まで残存。20・21は頸部横方向のミガキ部分まで残る。20は内面にハケ目が残るが、ややケズリ状。内面に焼成破裂痕がある。21は内外面に焼成破裂痕があり、接合部分で黒斑が途切れる焼成時破損I種dと、黒斑が土器の破損面までのびるI種eも認められる。22～28

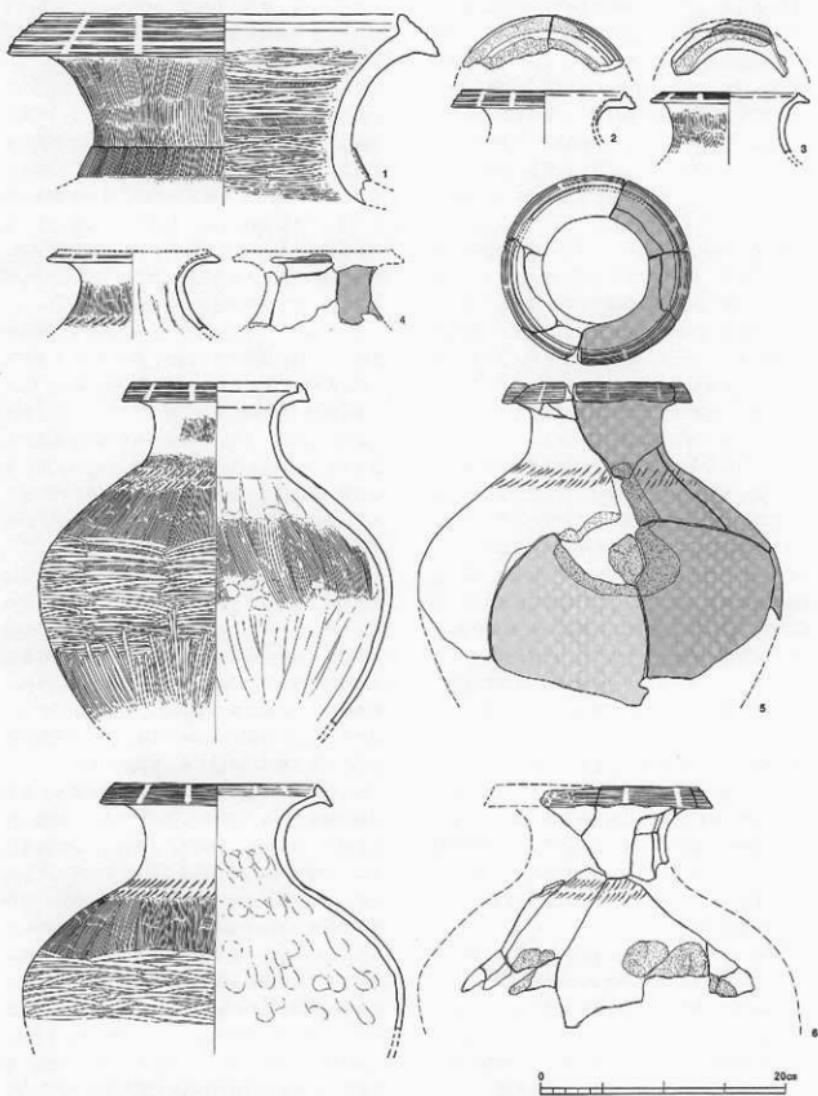


図130 9 トレンチ出土遺物実測図(1) (縮尺1/4)

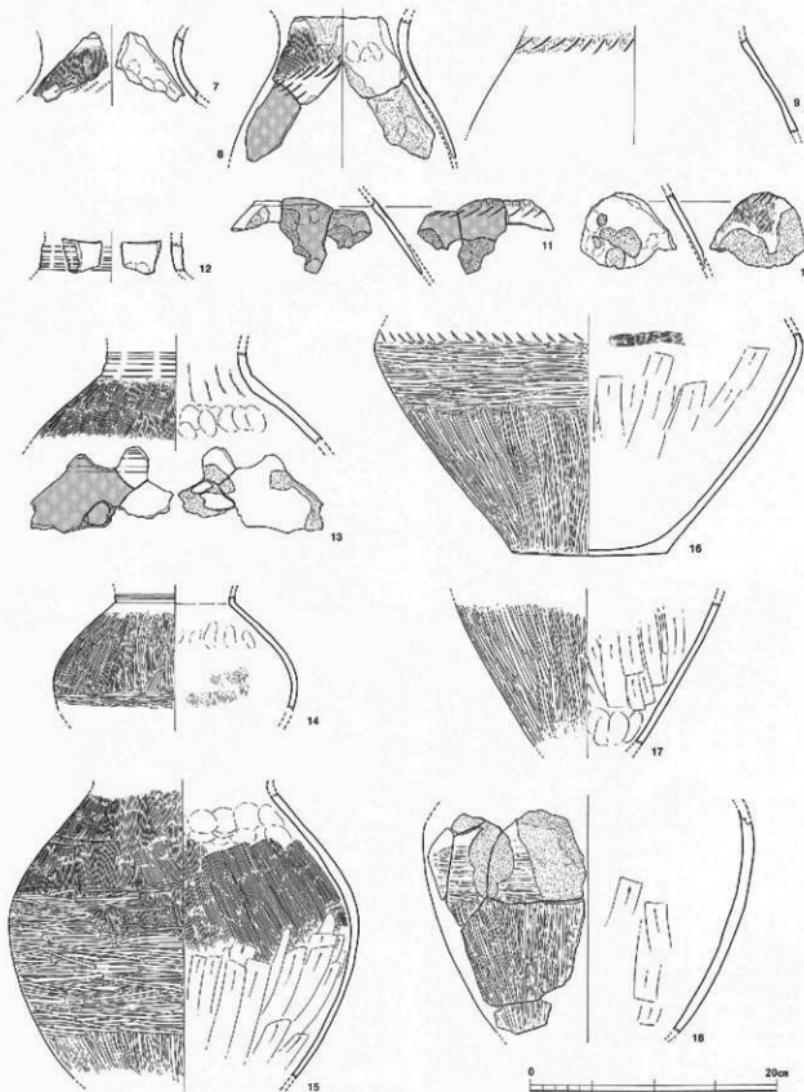


図131 9トレンチ出土遺物実測図(2) (縮尺1/4)

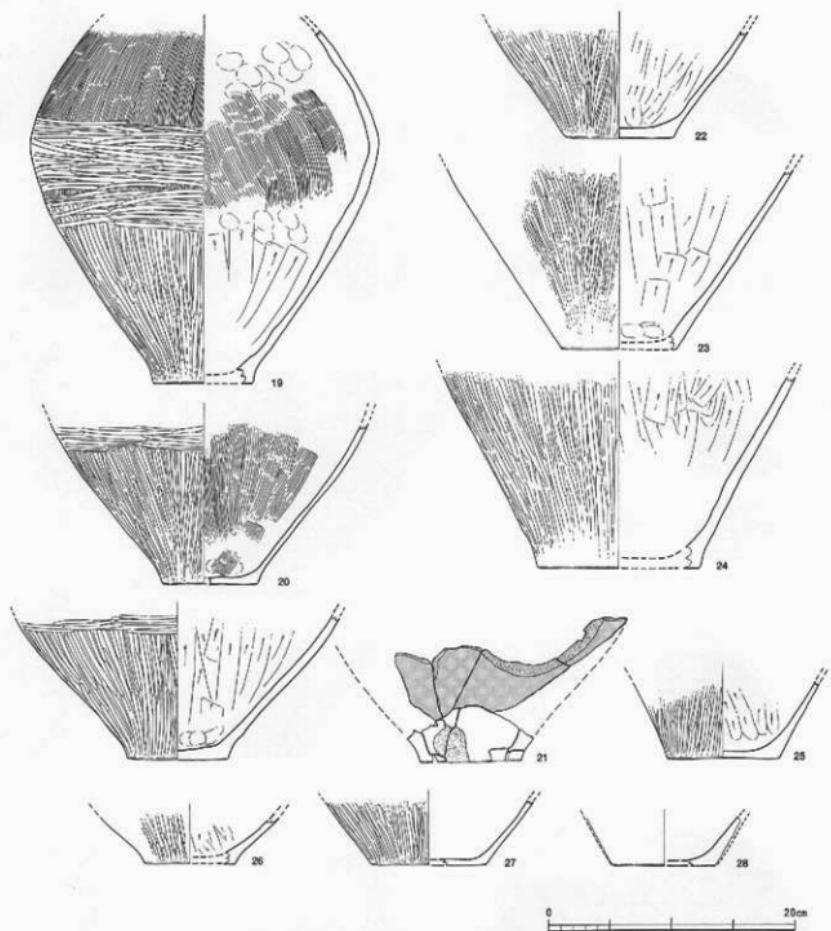


図132 9トレンチ出土遺物実測図(3) (縮尺1/4)

は、外面縦ミガキの範囲のみの底部。23・27は焼成や不良。25・28は赤焼け。特に28は、焼成破裂により、残存範囲において外表面が残らない。

29~32は甕。いずれも口縁端部を上下に拡張し、凹線文を施す。甕底部が見あたらないが、調整において壺に共通するため、先に壺底部とした中に甕底部の含まれる可能性が高い(17等)。29は口縁部から胴部中

位まで残る。外面は縦方向の細かなハケ目を全体に施した後、中位以下に縦方向のミガキを加える。内面は上半部には指頭圧痕が残るが、下半部には縦方向のケズリを施す。器壁も薄い。なお一部に焼成のあまい部位がある。30~32は、口縁端部の凹線文の上に、3個1対の縱位置の浮文を貼り付け、さらに上から凹線文と平行方向の押圧を加えている。30・31は口縁部拡張の

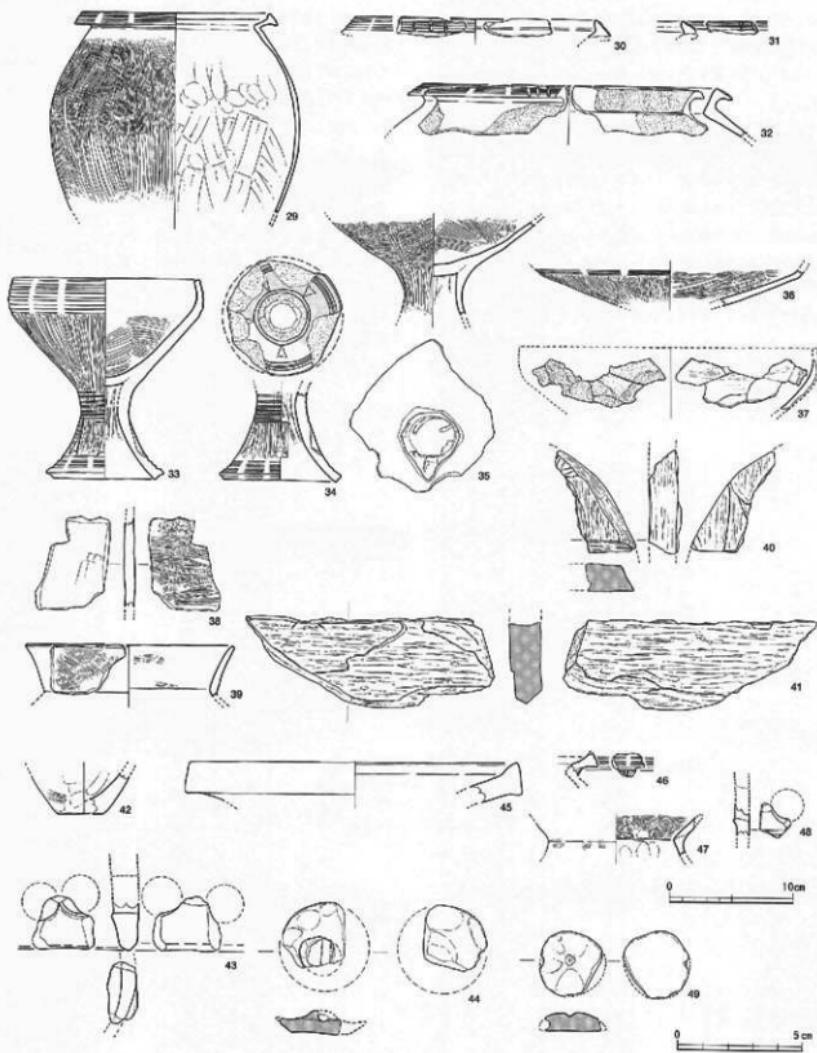


図133-9 トレンチ出土遺物実測図(4) (縮尺1/4、1/2)

接合面で剥離しているが、剥離面の色調は他の外表面と大きく変わらず、焼成時破損Ⅰ種の可能性が高い。また30は赤焼である。32は大型の肩の張る器形。内外面とも焼成破裂痕が連なり、表面のほとんどが剥落する。

33～37は高坏である。33は全形が復元でき、深い坏部と、脚裾部の開きが小さく短い脚部からなる。外面縦方向のミガキの後、口縁部・脚部に施す。口縁部上端面に1条の沈線文、外面に凹線文5条であり、脚部には7段の螺旋状に連続する沈線文を巡らせ、未貫通矢羽根透かしを5方向に開け、裾部は外面に3条、下端面に1条の凹線文を施す。なお、焼成時破損等の明確な痕跡は、本例に認められない。34は33と同型の脚部、外面縦方向のミガキ後、脚部に7条の沈線文と、脚裾部に凹線文を施す。沈線と凹線文の間には5方向の未貫通矢羽根透かしを施し、裾部には外面に凹線文

3条、下端に凹線文1条をもつ。外面は脚裾部をまわるように表面が剥離するが、剥離面の色調が周囲の器壁と異なり、焼成時破裂痕とは認められない。しかし、内面を中心で焼成は良くない。35は接合部。外面は坏部横ミガキ、脚部縦ミガキ。内面は坏部を横方向のハケ目調整、脚部横方向のケズリの後、円盤充填する。36は坏部で、口縁部凹線文の下端が残る。やや赤焼。37は外面がすべて剥離しているが、残存する内面から高坏の坏部とした。外面の剥離は不整形な面が連続し、焼成破裂土器片とみられる。

38は器台の筒部か。外面縦ハケ目後、横方向に間欠的にミガキを施す。内面はケズリか。胎土も他とはやや異なり、時期的にも後期に降る。39は壺の口縁部。わずかに外反気味に長く立ち上がる。後期中葉から後葉。

40・41は、節理の発達した結晶片岩の同一石材で、

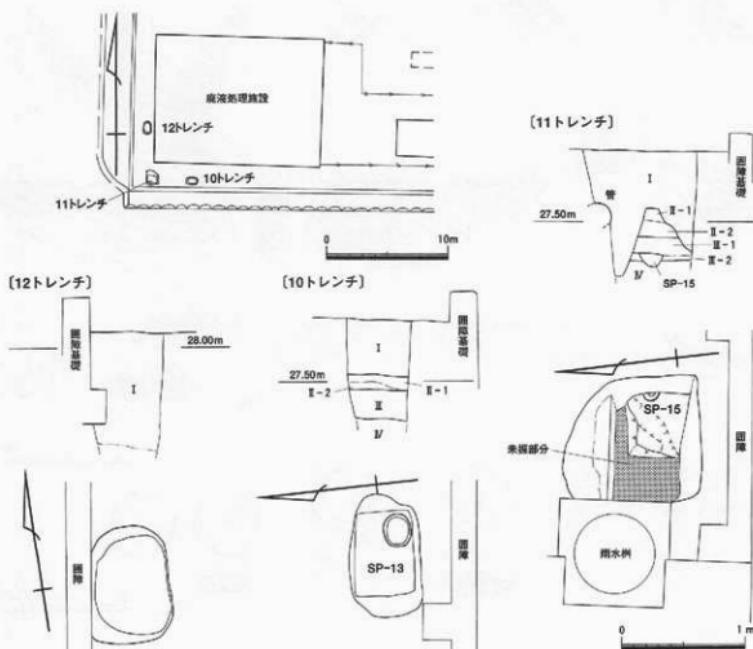


図134 10～12トレンチ位置図・実測図（縮尺1/400、1/40）

元は同一個体の可能性がある。40は側面を円弧状に加工している。

III層からは42~44が出土している。42は弥生土器壺底部。外面はタタキの痕跡が一部残り、底部も小さい。後期後葉。43・44はいずれも土製品と考えられる。43は、底部近くに近接して、孔径約1.6cmの円形透かしを2孔確認できる。復元底径4.2cmの器台形か。胎土はやや粗い。44は復元径3.6cmの鏡形。鉢部を中央からやや外れて貼り付け、鉢孔を穿つ。全面に指頭圧痕を残す。

45~49は撹乱層出土。45は弥生土器大型壺の口縁部で、上縁部を三角形状に肥厚させる。中期中葉か。46・47は弥生土器壺の口縁部。46は口縁部に凹線文2条を施し、頸部に突帯を貼り付け、刻みを加える。中期後葉。47は内面横ハケ目を残す、やや長目の口縁部をもつ。後期中葉から後葉。48は復元径2.8cmの円形透かしと、クシ彫直線文の一端がわずかに残る。器台の筒部を考える。弥生時代後期後葉か。49は片側が平坦なボタン状を呈し、膨らむ側の頂部に刺突痕がある。高環接合部の充填粘土とも考えられるが、やや小さく、外形も整う。ここでは土製品としておく。焼成は弥生土器と共に通す。

[吉田・三吉・山田]

(10) 10トレンチ (図134・135、図版39-5・43-7)

10トレンチの電柱を支える東側支柱埋設のために設定されたトレンチ。城北構内南西隅の廃液処理施設南側、11トレンチからは東約2.5mに位置する。東西約0.9m・南北約0.6mを割る。地表下45cmまではI層で、その下に約15cmのII層が確認できる。II層は、炭化物粒を少し含んでしまるのやや弱い、粘性のややある暗灰黄色砂質土であるII-1層と、1mm前後の砂粒を少し混じえ、鉄分の沈着があり、しまるのある褐色砂質土であるII-2層に分かれる。

地表下約60cmの標高27.42mからはIII層となり、以下27.20mまで続く。この地点のIII層は暗褐色砂質土で、1mm以上の砂粒をほとんど含まず、炭化物粒を少し含み、粘性がややある。なおIV層上面で、径30cm弱・深さ10cm弱の柱穴SP-13を検出している。埋土は暗褐色砂質土で、やや粘性の高い1~2cm大のIII層小ブロックとIV層の同大ブロックが斑状に混在する。

III層と撹乱層から若干の出土遺物を得ているが、図化できたのは2点。いずれもIII層出土である。1は内面と底面の側離した壺底部。2は、ラッパ状に開く高

坏脚部である。壺部の接地面は小さく、外面は丁寧なミガキを施す。残存範囲内で、透かしは認められない。後期後葉。

[吉田・山田]

(11) 11トレンチ (図134・135、図版39-6)

城北構内南西隅の廃液処理施設南西隅に接するよう設置される電柱に伴うトレンチである。約1m四方のトレンチを設定したが、トレンチに接して西側に雨水用排水溝があり、この埋設余掘りと、この溝に引き込まれる管路により、トレンチ西側と北側には擾乱が及ぶ。また南側も、南側四隅の設置に伴う余掘りがトレンチ南壁に迫る。したがって、本来の土層が残存するのは南東側50cm四方程度に過ぎない。東壁での所見によれば、II層が表土下50cm弱であらわれる。このII層は炭化物粒をわずかに含み、しまりがやや弱く、粘性のややある暗灰黄色砂質土のII-1層と、1mm前後の砂粒を少し混じえ、砂質がやや強く、鉄分が沈着してしまるのある褐色砂質土のII-2層に分かれる。

II層の下、標高27.36m付近から包含層であるIII層があらわれ、そのうち上部約15cmほどのIII-1層は暗褐色砂質土で、1mm前後の砂粒と1mm大の炭化物を少量、1mm大のIV層ブロックをわずかに含み、粘性がややある。対して下部5cmほどのIII-2層は、暗褐色砂

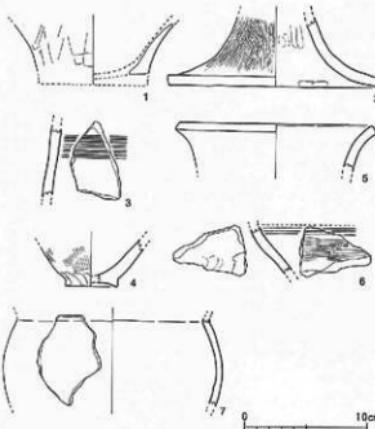


図135 10・11トレンチ出土遺物実測図 (縮尺1/4)

質土で、Ⅲ-1層に比べて、Ⅳ層の1~2cm大ブロックを多く含み、しまりがある。なお、調査区東壁際で、Ⅲ-1層下面から掘り込まれた、径20cm弱・深さ10cm強の柱穴SP-15を検出している。埋土は暗褐色砂質土で、砂粒をほとんど含まず、Ⅳ層の1cm未満のブロックを少量含み、粘性がややある。また、Ⅳ層上面には溝状の凹部があるが、これは根によるⅢ層の落ち込みとみられる。

狭い範囲ながらⅢ層と擾乱層から、比較的多くの土器が出土しており、しかも弥生土器ないしは土器で占められる。3・4はⅢ層出土。3は多条のヘラ描直線文をもつ撚体部。前期後業。4は、小さな高台状の上げ底底部。後期後業。5~7は擾乱層出土。5は壺口縁部。緩やかに外反しながら開く。後期前葉。6は壺の上唇部で、頸部境に2条のヘラ描沈線が残る。

前期中葉から後葉。7は短頭壺の胴部か。後期前葉。

[吉田・山田]

(12) 12トレンチ (図134)

11トレンチの電柱を支える北側支線埋設のために設定されたトレンチ。城北構内南西隅の廃液処理施設西側、11トレンチの北約3mに位置し、西側隣に接する、南北約1m・東西約0.7mのトレンチである。トレンチの東約0.2mに建物が迫り、地表下約1mまで掘り下げたが、擾乱を受けたI層が続き、人力掘削できる範囲も限られ、また隣接する南側11トレンチでの包含層検出レベルとも比較して、この深度までで調査を終えた。なお、擾乱層から弥生土器が1点出土している。

[吉田]

5 まとめ

今回の調査は、愛媛大学城北キャンパスの南縁に沿ってほぼ等間隔に調査区が設定された。そのため、一連の長いトレンチではないが、キャンパス南縁に東西方向のトレンチを設定したことにもなり、この地点の遺跡の広がりについて、新しい見を見多く得ることができた。また、9トレンチのSX-16では、土器焼成失敗品を含んだ時期的まとまりのある遺物を得ることができた。これら2点について、まとめておきたい。

[吉田]

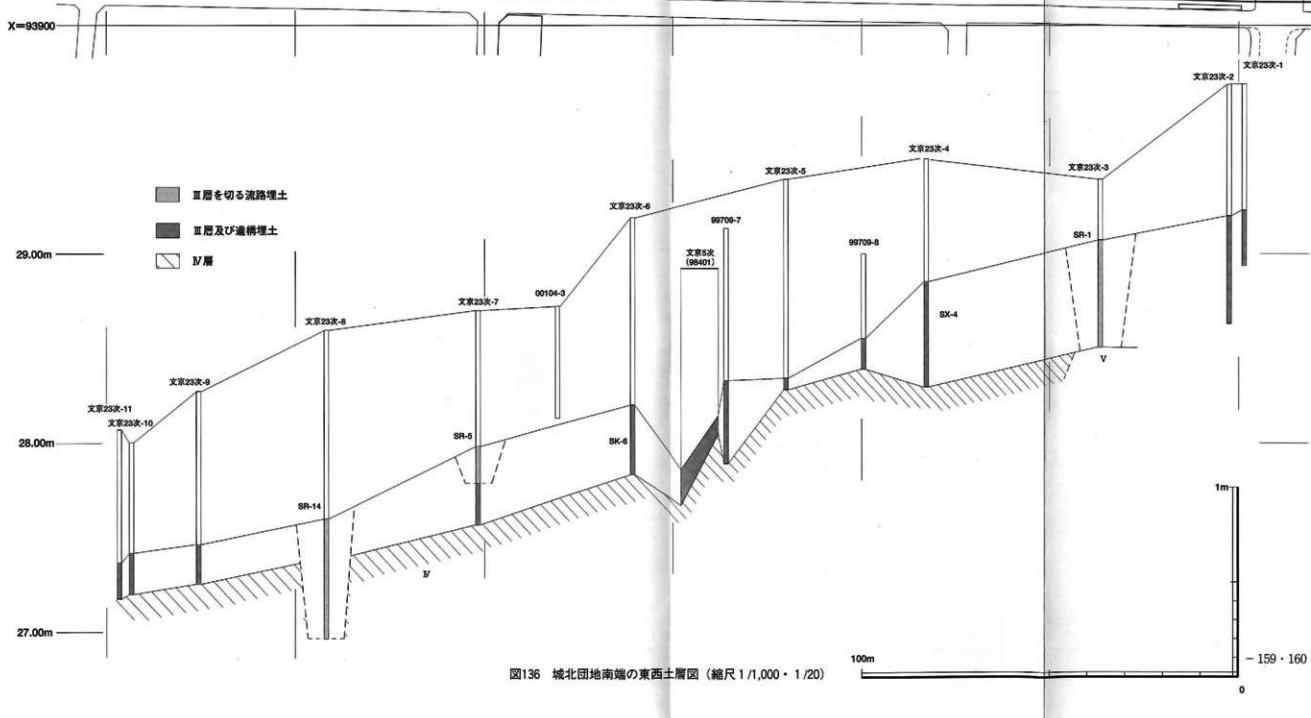
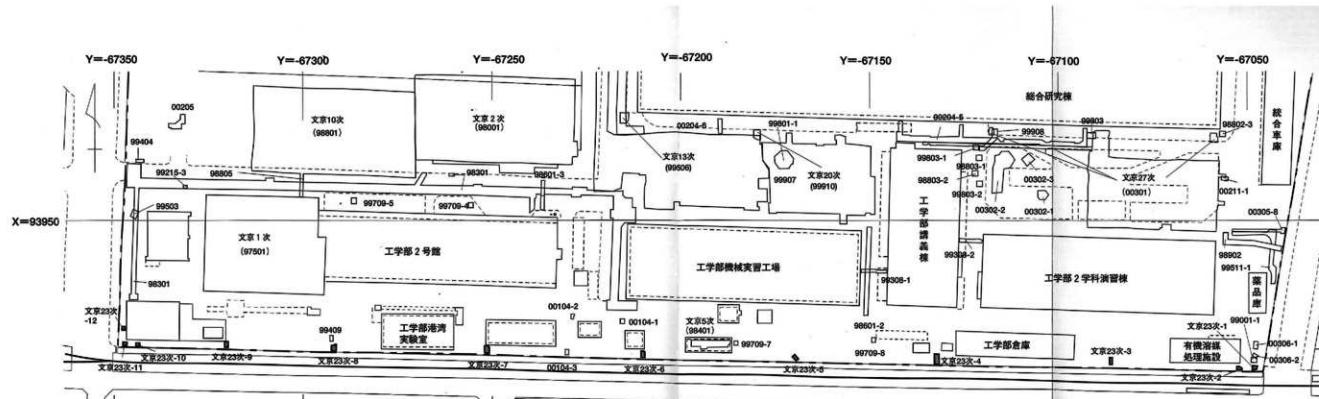
(1) 城北団地南縁の遺跡の展開 (図136)

今回の調査では、城北団地南縁にはほぼ等間隔にトレンチを設定し、東西方向の地形復元に有効なデータが得られた。まず、現地表は、東端で標高約29.9m、西端で約28.0mと、1.9mの差がある。地山検出高は、3トレンチのV層上面が標高約28.5m、西端の11トレンチで約27.2mと、比高差1.3m。現地表及び地山層であるIV層ないしV層の上面とも西側へ傾斜する面をなし、旧地形の傾斜がより緩やかである。

東部の1~4トレンチでは、明確な流水性の堆積は3トレンチのSR-1に留まるが、4トレンチのSX-3・4や1・2トレンチのⅢ層も、砂礫を多く含んだ流水性の再堆積層である可能性が高い。つまり、城北団地南東隅付近は、広く流水性の堆積が広がってい

ることになる。大学構外東方の、松山赤十字病院南西部での松山市教育委員会による試掘調査でも、やはり流路内堆積層が確認されており、一帯は、東西方向に伸びる微高地南縁の落ち際近くに当たることになる。なお、このような落ち際の埋没は、狭い範囲での出土遺物によれば、各地点で時期差があるらしい。1・2トレンチでは、Ⅲ層からは弥生土器のみの出土で、3トレンチSR-1は古墳時代後期、4トレンチSX-3・4は弥生時代後期を示している。

一方、5・6トレンチでは、流水性の堆積土が認められなくなり、東西方向の微高地が南に張り出した状況が推測できる。99709調査8トレンチでは弥生時代終末期の遺構があり、6トレンチより西部でも、弥生後期の遺物が点々と出土している。7トレンチSP-12などもその時期の遺構である。また、文京遺跡5次調査(調査番号:98401)や99709-7調査では、古墳時代後期の遺構・遺物も出土しており、7トレンチでは、古墳時代に下る流路内堆積層が認められた。7トレンチの地点では、南側低地帯の堆積が、古墳時代に一部北に拡張していたことになる。8トレンチでも厚い流路内堆積層であるSR-14を検出しているが、これは弥生時代後期に遡る可能性が高い。北側の文京遺跡1次調査(調査番号:97501)でも弥生時代後期の遺構・遺物が出土しているが、SR-14に連なるような流路や



溝などではなく、SR-14は城北団地南縁の低地帯本流部の堆積が北側に拡張したものらしい。

9～12トレンチでは、再び安定したⅣ層を検出できるようになり、1次調査区はじめ、北側で検出されている遺構群からの広がりが想定できる。9トレンチの、弥生時代中期後葉の土器焼成失敗品一括投棄であるSX-16や、その下での比較的大型の柱穴SP-17、そして10・11トレンチの柱穴である。中期後葉から後期を中心とするが、その一方で、前期に遡る弥生土器の出土もあり、周辺に前期に遡った遺跡の存在が予測される。なお、9トレンチではⅢ層から鏡形土器品が出土していることも注視される。

以上のように、城北団地南縁一帯は、東から西へと緩やかに傾斜する微高地の、南側落ち際に位置し、地点によって低地帯が南北に拡張・縮小している状況が復元でき、時期毎に異なる遺跡の展開をみせていく。まず、弥生時代前期の遺物が点々としながら出土している。一方、文京遺跡で最も出土量の多い中期後葉は、7トレンチのSP群あるいは9トレンチのSX-16・SP-17が目立った造構であり、やや西側に偏って、1次調査区からの広がりを想定できる。20次調査区や27次調査区の状況からして、城北団地南縁東部への漸密な広がりは想定できない。弥生時代後期の遺物も、6トレンチ以西で点々と確認でき、99709-8調査では明確な遺構も認められた。北側への広がりはなお不明ながら、やはり城北団地南縁西半に後期の遺跡も広がる可能性が高い。古墳時代後期の遺構・遺物は、6・7トレンチで確認できるが、5次調査や99709-7調査にも認められ、5次調査区を中心に遺構の広がることが想定できる。また北側でも13次調査区と20次調査区の西部で同時期の遺跡が展開しており、あるいは一連の遺跡の広がりも想定できよう。

[吉田]

(2) SX-16出土土器の位置づけ (図137・138)

9トレンチのSX-16出土土器は、狭い範囲と短時間での調査のため、詳細な出土状況を記録できていないが、出土遺物の内容から、土器焼成失敗品を多く含んだ一括廃棄資料とみなすことができる。以下、先に報告したSX-16出土資料土器の1～37について、その位置づけを考察する。

まず、37点の内訳であるが、壺28点、壺口縁部4点、高坏5点である。ただし、報告でも述べたように、壺には17など壺底部の可能性のあるものも含まれてい

る。それでも、壺が少なく壺の多いのが特徴である。

また、器種毎の内容にも偏りがある。まず壺は、口縁部に凹線文をもち、長めの頸部が胴部に緩やかに連なり、肩部に「ノ」字状押圧文を巡らす壺①が10点(2～11)、大型の口縁部に凹線文、頭部に低平な貼付押圧突帯をもつ壺②が1点(1)、頸部に凹線文をもつ壺③が3点(12～14)である。なお壺③は、凹線文の特徴によって、12・13と14に2分できる。また、胴部・底部の多くは、形態的にも數的にも壺①と推測できる。そして、内面下半にケズリを行う個体が大半である。以上の3型式のいずれにも、焼成失敗品が含まれている。

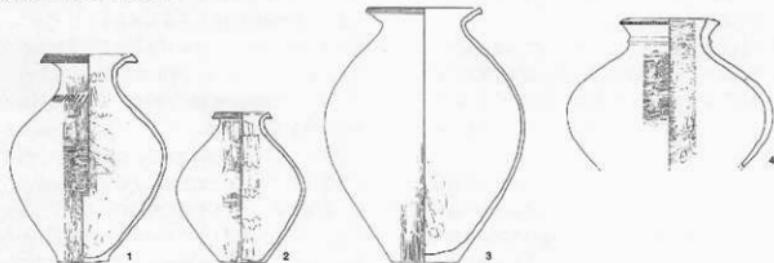
一方、壺口縁部は、いずれも凹線文をもつ個体であるが、報告でも述べたように、30～32は同巧で、29に比べて胴部の張りが強いと予測できる。したがって、29を壺①、30～32を壺②としておく。なお、焼成失敗品は、壺①には認められず、壺②の1例がある。

高坏は、矢羽根透かしをもつ個体を2点(33・34)確認できるが、他の3点は全形を窺い型式を認定することが難しい。大きくは、凹線文を有する型式として、一括しておく。なお、焼成失敗品は、焼成破裂土器片である37があり、あるいは34の矢羽根透かしの脚部も何らかの焼成失敗品の可能性を考えられる。

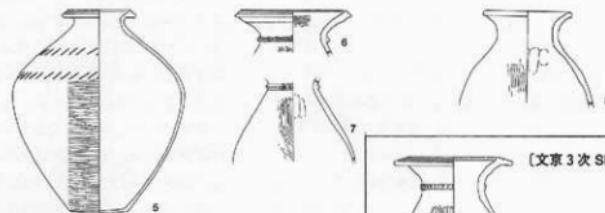
以上のような器種・型式の組み合わせは、これまで中期後葉に位置づけられてきた土器様式の一部であることは間違いない。しかし同時に、SX-16出土土器に偏りがあるのも事実である。図137・138は、梅木(2000・2004等)により、中期後葉とされる他の資料群と比較を試みたものである。来住庵寺遺跡第15次調査3区下段Ⅶ層出土土器(西尾編1993)、文京遺跡3次調査SB-1出土土器・同SK-8出土土器(栗田編1992)を中心、他文京遺跡2次調査SB-4出土土器(栗田編1992)、同3次調査SK-7出土土器(栗田編1992)、同10次調査SX-10・SD-7出土土器(宮本編1991)を補った。

まず壺においては、壺①(14)としたものは、他の資料でもほぼ見いだすことができる(1・10・11)。頸部の屈曲の強い短頸のもの(2・5)まで含めれば、ほぼ普遍的な型式と言え、中期後葉の壺の主要型式とできる。その中でも、SX-16においては、長頸ばかりで占めることが特徴的である。壺②(15)も、やや小型のものも含めて、他の資料群に認めることができる(12・13)。ところが、壺③(16・17)は、道後平野に

〔来住磨寺15次3区下段VII層〕



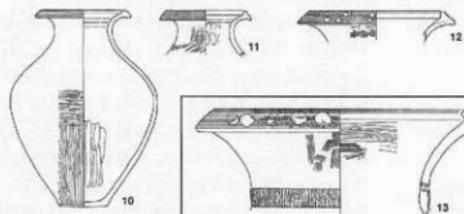
〔文京3次SB-1〕



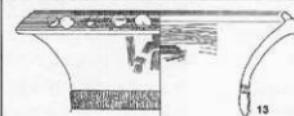
〔文京3次SK-17〕



〔文京3次SK-8〕



〔文京10次SX-1〕



〔文京23次SX-16〕

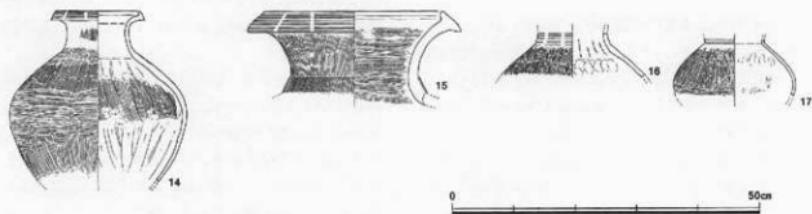
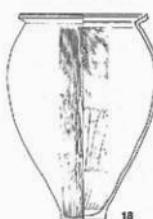
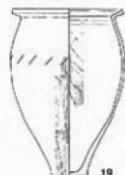


図137 道後平野の弥生時代中期後葉の土器(1) (縮尺1/8)

[来住庵寺15次 3区下段VI層]



18



19



20



21



32



33



34

[文京3次SB-1]



22



23



24



35



36



37

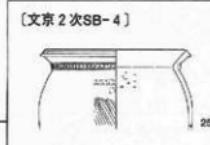
[文京3次SK-8]



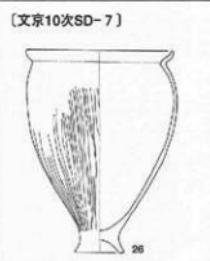
27



28



25



26



38



39

[文京23次SX-16]



29



30



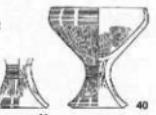
31



42



43



40



図138 道後平野の弥生時代中期後葉の土器(2) (縮尺1/8)

おいてはほとんど認められない。その一方で、SX-16出土器にはない型式を、他の資料には見いだすことができる。凹線文をもつものでも、頸部に貼付押圧突帯文をもつ壺（6・7・9）であり、そして凹線文をもたない壺（4・8）である。したがって、他の中期後葉土器群の壺と比較して、長頸の壺①への集中と凹線文を有する個体のみでの構成に、SX-16出土壺の特徴を指摘できる。さらに、壺をも含みながら壺と一括した底部の多くは、ケズリという技法の共通性を有していたことも特徴的である。

一方、壺についても、4点の口縁部がいずれも凹線文を有しており（29～31）、凹線文をもつ個体のみでの構成という同様の特徴があつてはまる。詳細を比較してみても、他の土器群の凹線文は、基本的に1条ないし2条に留まり、口縁部の拡張は小さく（18・19・22・23・25・27）。口縁部の拡張具合・凹線文の条数・浮文の有無において、差が存在する。また、他の資料群においては、凹線文をもたない個体（21・26）も少なからず存在し、これらの底部は上げ底を呈する（20・24）。こういった口縁部・底部も、SX-16においては見出せず、やはり凹線文の通用が特徴として指摘できよう。

他方、高坏については、SX-16出土土器も含めて、口縁部に凹線文・脚部に矢羽根透かしを有することで、ほぼ一致した様相を窺うことができる（32～40）。

以上、器種毎に見てきたが、改めてSX-16出土資料について、凹線文を有する型式のみでの構成と、底部内面のケズリを、強い特徴と指摘できる。そして、これら型式それぞれが、いずれも焼成敗品を含んでおり、近接する地点で製作されたことが明らかである。焼成単位を示す土器群と理解することができよう。

ただし、これを一定の時間に有する細分土器様式とできるかは、なお考慮を要する。凹線文・ケズリといった、技法的なまとまりが強いだけに、同時期における

異なる技法を有する製作者集団に対応したことも考慮されなければならない。実際、これらの技法は、文京遺跡をはじめとした道後平野で、決して普遍的なものではない。壺③や壺①・②など、胎土が異なれば、搬入品として理解されてきたものである。とりわけ、凹線文B種を頸部に有する壺③など、中部瀬戸内地域に、類例を求めるべきではない。壺②や壺内面下半のケズリも同様であろう。このような、中部瀬戸内地域の土器作り技法を有した者の手による、一回の土器焼成に対応する資料として、まずSX-16出土資料を評価しておくべきである。

このような土器製作単位が、時間差を表す小様式となり得るのか、それとも文京遺跡における同時期の土器製作単位の差になるのか、密集居住域出土土器との比較によって、判断することとしたい。【吉田】

〔参考文献〕

- 梅木謙一, 2000『伊予中部地域』『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社。
梅木謙一, 2004『伊予中部の弥生中期中葉～後期前業』『第53回埋蔵文化財研究集会 弥生中期土器の併行関係 発表要旨集』埋蔵文化財研究会。
栗田茂敏編, 1992『文京遺跡－第2・3・5次調査－』松山市文化財調査報告書28。
田崎博之, 2004『土器焼成・石器製作残渣からみた弥生時代の分業と集団間交流システムの実証的研究』平成13（2001）～平成15（2003）年度科学研究費補助金〈基盤研究（C）（2）〉研究成果報告書。
西尾幸則編, 1993『来住庵寺遺跡－第15次調査報告書－』松山市文化財調査報告書34。
宮本一夫編, 1991『文京遺跡第10次調査－文京遺跡における弥生時代遺跡の調査－』愛媛大学埋蔵文化財調査報告書III。

表11 文京遺跡23次調査出土遺物觀察表

遺物番号	出土状況	遺物の内容		文様・調整・色斑・加工等の特徴	取扱番号
		実測	上政		
図122 1-3トシシヨ土器遺物実測図					
1 F101 r10 石器	石器	鉢形	鉢形片断		1
2 F102 r12 木器	陶生土器	壺	上腹部	外側面付突起2条。安帝模ナメ。内側面微凸。石質・灰石・表面多少多く含む。	1
3 F102 r11 砕瓦	瓦	瓦	瓦蓋	瓦蓋ミガキ。瓦蓋ヨコヒダ。内側面微凸。通字上付。既良な仕事に石瓦・瓦石の構成混含。	1
4 F104 r14 SR-11.3	陶生土器	壺	底部	内側面微凸。外側面凹。内側面灰。石質・灰石少々含む。	1
5 F105 r14 SR-11.3	陶生土器	高杯	杯部	口縁部凹陥5条。引削1さき。内側面横2条。内外面に赤い青空色。精良な仕事に石英・石・碧玉の構成混含。	1
図134 4レンガ土器遺物実測図					
1 F107 r19 SK-3	陶生土器	壺	口部	内側面横ナメ。内側面微凸。精良な仕事に石英・灰石・青空の構成混含。	1
2 F107 r17 木器	陶生土器	壺	底部	外側面ミガキ。内側面横2条。外側面に赤い微凸。内側面微凸。石質・灰石・表面粗粒や多く含む。	1
図136 6レンガ土器遺物実測図					
1 F116 r26 直瓶 (SK-6)	陶生土器	壺	上部	ハラ語き直瓶と側面による頭部瓦絞繩。頭部瓦絞繩。内側面直柱丸。外側に赤い黄褐色。内側面微凸。白石・長石・漂石・赤色粒や多く含む。	1
2 F113 r24 直瓶 (SK-6)	陶生土器	壺	底部	内側面微凸。外側面凹。内側に赤い微凸。石質・長石・青石・赤色粒や多く含む。	1
3 F115 r25 直瓶 (SK-6)	陶生土器	壺	奥	上腹部内側面横アーチ。体部表面微凸ハク。体部表面白K10-骨頭部。外側面に赤い微凸。石質・長石・碧玉の構成混含。	1
4 F112 r24 里瓶 (SK-6)	風扇形	壺	剥片	外側面タケウカタメ。内側面青空2条。外側面凹。内側面横2条。石質・長石・青空の構成混含。	1
5 F114 r25 里瓶 (SK-6)	石器	片	精良		1
6 F116 r22 混瓦	陶生土器	壺	頭部	ヘラ語き瓦付直瓶。外側面ナメナガ。内側面に赤い。内側面にSK-6。裏面黒。石質・長石・雲母や多く含む。	1
7 F119 r22 混瓦	陶生土器	壺	上半部	上腹部直瓶。頭部瓦絞繩付。外側面斜。口縁部内側面横ナメ。体部外側面グサツ。体部内側面2条。外側面微凸。内側面赤。石質・長石・赤色粒や多く含む。	1
8 F110 r22 混瓦	陶生土器	壺	上部	内側面横ナメ。外側面に赤い微凸。内側面に赤い。石質・長石・青空や多く含む。	1
9 F111 r22 混瓦	陶生土器	壺	剥片	外側面ナメ2条。内側面横2条。外側面凹。内側面内白色。石質・長石・赤色粒含む。	1
10 F108 r22 混瓦	陶生土器	壺	頭部	青空細。精良な仕事。白K10-。内側面ナメ。外側面ナメ。底付ナメ。	1
図127 7レンガ土器は夷物実測図					
1 F134 r05 SP-8	陶生土器	壺	頭部	外側面ナメ。内側面灰。内側に赤い。内側面に赤い。黄褐色。石質・長石・漂石含む。	2
2 F118 r22 SP-8	石器	明石	3前部	3前部丸。直筒型。	2
3 F135 r57 SP-10	陶生土器	壺	海螺	円筒形。直筒丸。腹に縦縫合さき。内側面ナメ。外側面灰。内側に赤い。漂石。石質・長石・青母・半透明色やや含む。	2
4 F136 r56 SP-11	陶生土器	壺	上腹部	内側面横ナメ。外側面斜。内側に赤い。漂石。石質・長石・青空・雲母・赤色粒含む。	2
5 F147 R1 SP-12	陶生土器	伴	全部	内側面横2条。外側面横2条。外側面凹。内側面内白色。石質・長石・雲母・赤色粒や多く含む。	2
6 F130 r31 重壺	陶生土器	壺	口部	口縁部落葉2.4mm2.2mm。外側面横ナメ。内側面灰。外側面内白色。内側に赤い。漂石。石質・長石・長石多く含む。	2
7 F127 r31 重壺	陶生土器	壺	上部	口縁部落葉2.4mm2.2mm。外側面横ナメ。外側面内白色。内側に赤い。漂石。石質・長石・青母・半透明色やや含む。	2
8 F129 r32 重壺	陶生土器	壺	上部	内側面横ナメ。外側面横ナメ。内側に赤い。漂石。石質・長石・青母・半透明色やや含む。	2
9 F133 r31 重壺	陶生土器	壺	剥片	内側面ガラナメ。内側面横2条。内側面横ナメ。外側面横2条。内側に赤い。漂石。石質・長石・雲母含む。	2
10 F199 r31 重壺	陶生土器	壺	上部	ランク直筒又・淡青又。外側面斜。内側に赤い。漂石。内側面赤土と石英・長石の構成混含。	2
11 F132 r31 重壺	陶生土器	壺	底	内側面横ナメ。内側面斜。内側に赤い。漂石。内側面赤土と石英・長石の構成混含。	2
12 F129 r31 重壺	陶生土器	壺	口部	内側面横ナメ。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土と石英・長石の構成混含。	2
13 F200 r31 重壺	陶生土器	壺	口部	内側面横ナメ。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土と石英・長石の構成混含。	2
14 F203 r32 重壺	陶生土器	壺	口部	内側面横ナメ。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土と石英・長石の構成混含。	2
15 F126 r31 重壺	陶生土器	壺	口部	内側面ナメ・横ナメ。内側面横2条。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土と石英・長石の構成混含。	2
16 F226 r31 重壺	陶生土器	壺	口部	内側面ナメ・横ナメ。内側面横2条。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土と石英・長石の構成混含。	2
17 F33 r51 重壺	陶生土器	2年	口部	内側面ナメ。外側面横2条。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土と石英・長石の構成混含。	2
18 F202 r32 重壺	陶生土器	壺	脚部	外側面横ナメ。内側に赤い。漂石。内側面横2条。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土含む。	2
19 F125 r29 SR-5	陶生土器	壺	底部	外側面横ナメ。内側面横2条。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土含む。	2
20 F124 r29 SR-5	陶生土器	壺	底部	内側面横ナメ。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土含む。	2
21 F125 r29 SR-5	陶生土器	壺	底部	内側面横ナメ。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土含む。	2
22 F120 r27 混瓦	陶生土器	壺	頭部	内側面横ナメ。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土含む。	2
23 F121 r27 混瓦	陶生土器	壺	頭部	内側面横ナメ。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土含む。	2
24 F119 r27 混瓦	陶生土器	壺	頭部	内側面横ナメ・カタメ。内側面横2条。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土含む。	2
25 F122 r28 混瓦	陶生土器	2年	頭部	内側面横ナメ。内側面内白色。内側に赤い。漂石。内側面赤土含む。	2
図129 8レンガ土器遺物実測図					
1 F159 R3 SR-12.3号下部	陶生土器	壺	底部	外側面横2条。頭部横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	3
2 F162 R3 SR-14.7号	陶生土器	壺	底部	内側面横2条。内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	3
3 F137 r41 SR-14.7号	陶生土器	壺	口部	内側面横2条・横ナメ。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	3
4 F203 r43 SR-12.3号上部	陶生土器	壺	頭部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	3
図130 9レンガ土器遺物実測図					
1 F171 r53 SX-36.7号	陶生土器	壺	口部	内側面横2条。頭部横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	4
2 F157 r53 SX-36.7号	陶生土器	壺	口部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	4
3 F162 r52 SX-36.7号下部	陶生土器	壺	口部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	4
4 F177 r52 SX-36.7号下部	陶生土器	壺	口部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	4
5 F165 r53 SX-36.7号下部	陶生土器	壺	上半部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	5
5 F165 r53 SX-36.7号	陶生土器	壺	下半部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	5
6 F173 r19 木器	陶生土器	壺	上半部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	5
5 F162 r52 SX-36.7号下部	陶生土器	壺	中	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	5
5 F163 r53 SX-36.7号	陶生土器	壺	中	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	5
7 F158 r53 SX-36.7号	陶生土器	壺	頭部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	6
8 F153 r52 SX-36.7号下部	陶生土器	壺	上部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	6
8 F153 r53 SX-36.7号	陶生土器	壺	上部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	6
9 F182 r53 SX-36.7号	陶生土器	壺	上部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	6
10 F159 r53 SX-36.7号	陶生土器	壺	上部	内側面横2条。内側面横2条。内側面に赤い。漂石。内側面赤土含む。	6

IV 文京遺跡の弥生集落の一様相

—遺跡南部の状況—

文京遺跡20次調査と23次調査は、いずれも愛媛大学城北団地の南部に位置する。そして、明らかになつた調査地点の遺跡内容は、北側の法文学部周辺（3・7次調査区）や旧グラウンド部分（12・14・16次調査区）とは、異なる様相を示した。以下、そのような状況に対して、若干なりともまとめを行っておきたい。

まず、面的な調査であった20次調査では、意外と弥生遺跡の展開が散漫であるという、他の調査地点とは、些か異なる様相が明らかとなつた。北側には、浅い窪地を挟んで大型掘立柱建物を望むものの、遺構の密度と溝の存在からすれば、弥生集落の東限という想定する可能な状況が、20次調査区にはある。

他方、3・7次調査区は、微高地の高所にあたり、大型掘立柱建物や方形周溝、大型竪穴式住居などが所在する。その西側前面の、12・14・16次調査区やその北側には、大規模密集型と言える弥生集落が展開する。そして、これ以外の調査区においても、特徴的な遺構・遺物の分布を見せる。2次調査区において小型掘立柱建物が群在するとともに、微高地の縁辺にあたり北側には谷を控える18次調査区南側でも、同様の小型掘立柱建物が集まる。また、10次調査区では鉄器が比較的多く出土し、ガラス滓や研磨痕跡のない銅鏡片も出土している。このように、集落内各所で異なる特徴を、文京遺跡においては窺うことができる所以である。

そのような中にあって、20次調査区で、打製石器製作を行う小型円形竪穴式住居SC-35が1棟のみ認められたのである。20次調査区では、西側に密集型弥生集落の東辺を区画するかのような溝群があり、その東にSC-35は位置する。中期後葉から後期前葉の住居であり、必ずしも旺盛な石器製作を必要とする時期でもない。また、結晶片岩製の磨製石器製作は行われていない。集落縁辺部での、特定品目の生産活動を示す状況を読み取ることができよう。

詳細は未検討ながら、20次調査のさらに東部の27次調査でも、やはり散漫な弥生遺構分布の中にあって、竪穴式住居SC-9周辺で、打製石器製作が想定される状況が指摘されている。20次調査SC-35とともに、文

京遺跡の弥生集落東南縁辺部において、打製石器製作という様相を指摘できる可能性が高い。27次調査の詳細を検討した上で再論したい。

他方、集落縁辺部での生産活動といった様相の一端を同じように示すと考えられるのが、23次調査9トレンチ検出の、SX-16とした土器焼成失敗品の一括発見である。中期後葉を示す良好な資料であるとともに、その中でも、凹線文と内面ヘラケズリという技法的まとまりをもち、同時期の資料にあっても、偏在性の高い土器群である。この土器組成自体の意味についても、土器製作を考える有効な視点となるが、密集居住域出土土器相との比較を通じてなされねばならず、今後の課題である。ここでは、土器焼成失敗品の出土位置として、分析を加えておきたい。

まず、23次調査SX-16は土器焼成失敗品の出土であり、焼成場所そのものは特定できないが、近傍で土器焼成が行われた可能性が高い。23次調査自体、目的的な調査で、周辺の遺構展開状況は不明である。北側1次調査区で竪穴式住居などが出土しているが、より北側の密集居住域ほどの密度ではない。むしろ密集居住域との間には、浅い窪地を挟み、2次調査区は、小型掘立柱建物が集まり、倉庫群が位置する空間と見なせる。つまり、密集居住域は南側に拡大ないのである。23次調査SX-16が、密集居住域とは一線を画した位置に所在することは間違いない。

そして、比較的近接する10次調査区においては、遺跡内の鉄器出土がやや集中するとともに、ガラス滓や研磨痕跡のない銅鏡片の出土から、ある種の生産活動が想定できる。したがって、1次調査区の位置づけが曖昧ながら、愛媛大学城北団地構内の西南部一帯が、土器や金属器に関わる生産活動域として位置づけられる可能性が高いとすることができよう。

同様の土器焼成失敗品の出土は、20次調査に隣接する13次調査SK-29もある。やはり集落縁辺域に近い場所での土器生産、失敗品投棄という状況であろう。ところが、密集居住域に含まれる12次調査区内でも、土器焼成失敗品の一括発見が存在する。上器製作・土

器焼成・失敗品投棄という活動の一端が、密集居住域に持ち込まれることもあったことを認識し、土器群の内容に応じて、その意味するところを正確に評価しなければなるまい。

文京遺跡において、弥生集落内各所の機能を限定的にのみ捉えることは適当でないが、一方で、居住域・生産域等と呼び得る差異が、弥生集落内には存在することができる。とりわけ、密集居住域との対比からして、浅い窪地を挟んだ南側で、種々の生産活動が想定される状況である。生産内容とそれに応じたさらなる空間分割はなお不明な部分が多いが、土器・石器・金属器

の生産の場が、集落南部の縁辺域に配置された様相を想定しておきたい。

いずれにせよ、集落縁辺域と対比すべき、集落の中核域あるいは密集居住域の様相が明らかになって初めて、弥生集落の構造的理縦は進展する。12・14・16次調査区を中心とした密集居住域の資料が未検討のままでながら、これらの予想される成果と比較すべき成果が、遺跡内の南部に偏した20次調査と23次調査で得られたことにこそ意義がある。密集居住域の様相が十分明らかになっていない現時点での、文京遺跡の弥生集落素描であることを明記して、結びとする。【吉田】

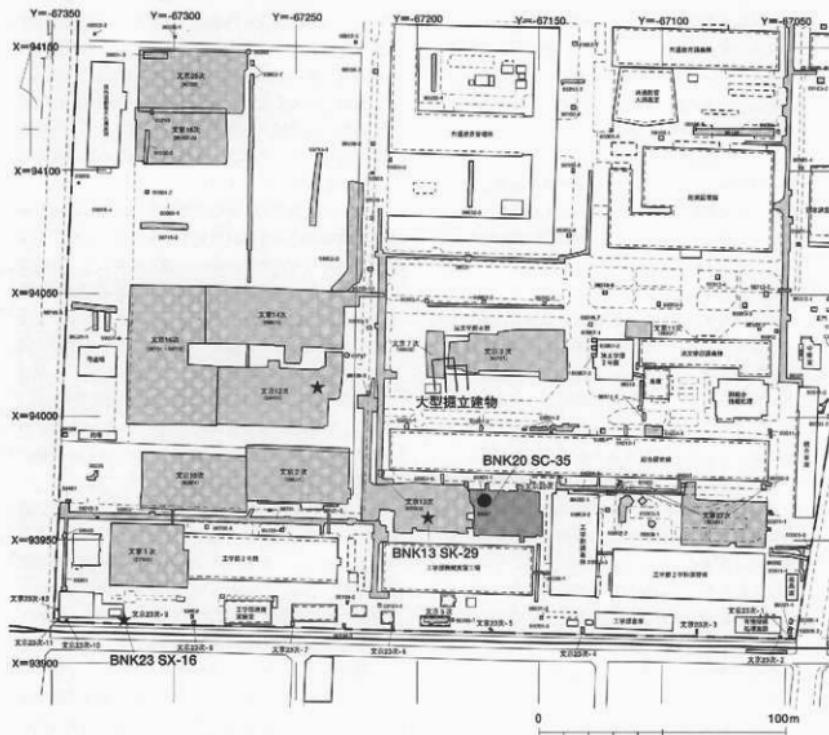
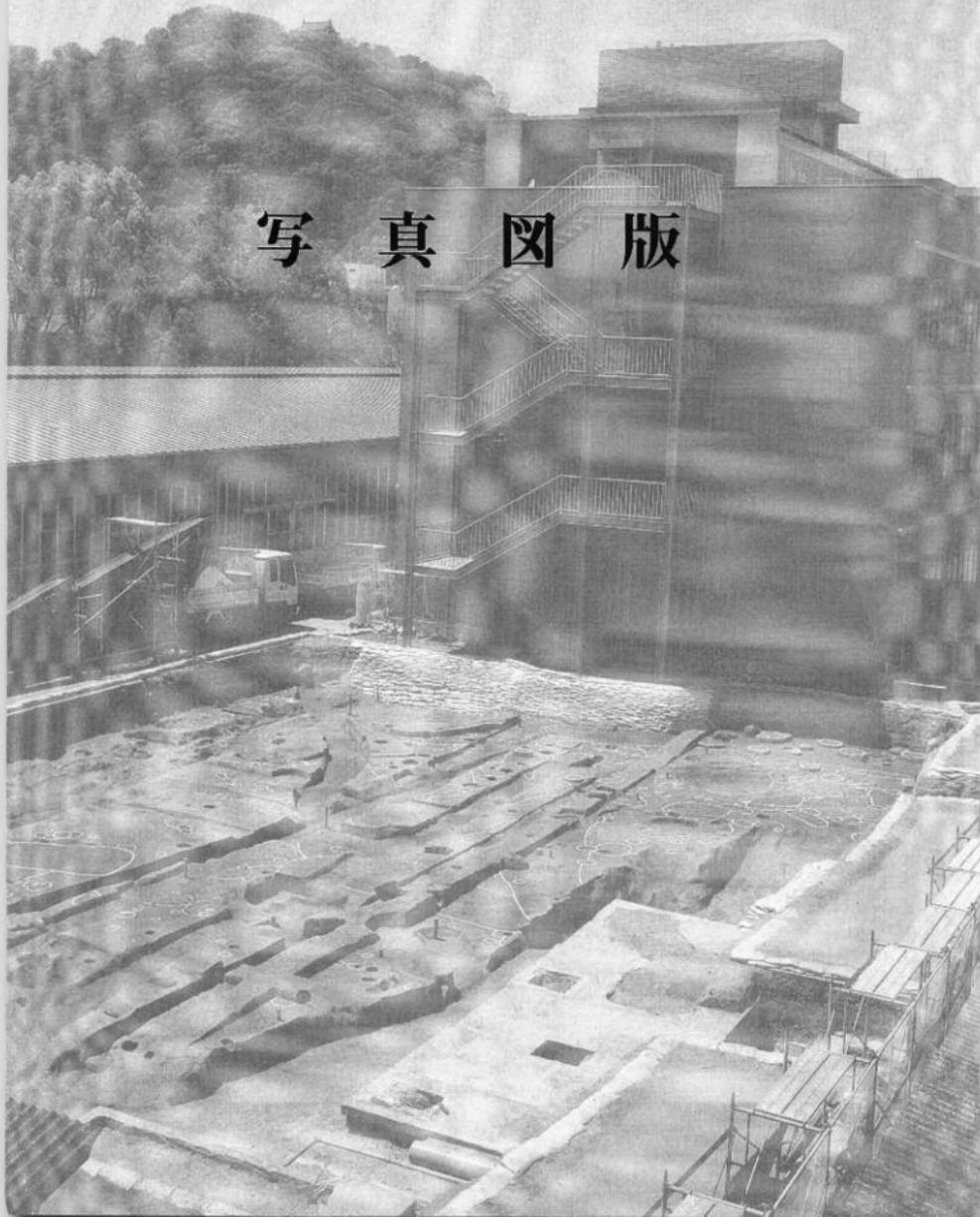


図139 文京遺跡における土器焼成失敗品他の出土地点（縮尺1/2,000）

写 真 図 版





1 弥生・古墳面遺構検出状況（南東から）



2 弥生・古墳面完掘状況（南東から）



1 SC-35焼土・炭①・②検出状況（北から）



2 SC-35焼土・炭①・②検出状況（西から）



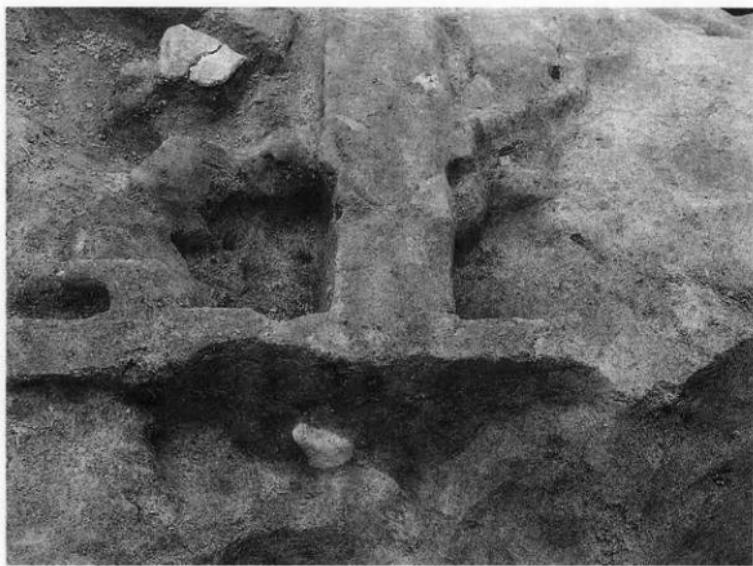
1 SC-35屋根材検出状況（南から）



2 SK-48屋根材検出状況（北から）



1 SK-48 A-A' 畔 (北から)



2 SK-48 B-B' 畔 (北西から)



1 SK-48炭化物・赤色顔料検出状況（北東から）



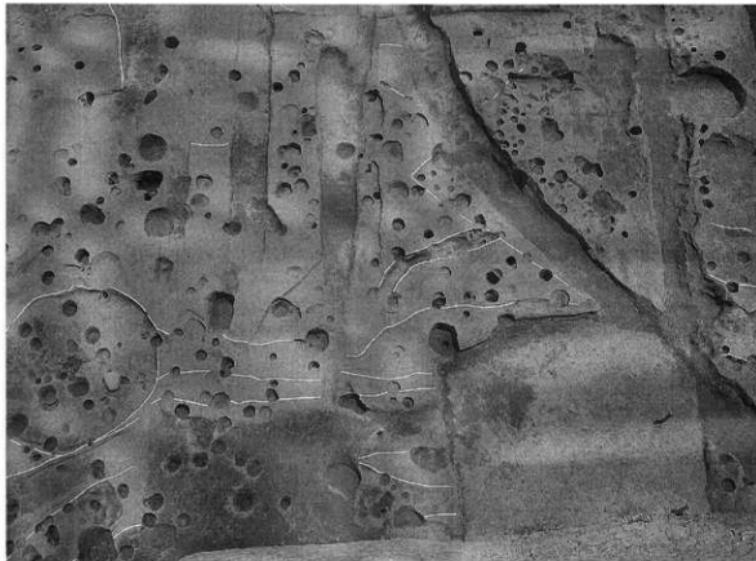
2 SK-48完掘状況（北西から）



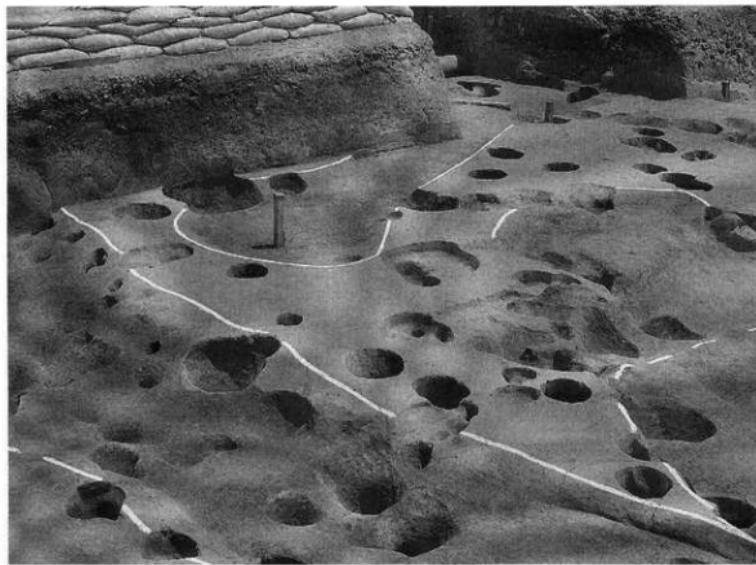
1 調査区北西部弥生・古墳面完掘状況（西から）



2 SD-33・34・36（南から）



1 調査区南西部弥生・古墳面完掘状況（西から）



2 SX-40完掘状況（南西から）



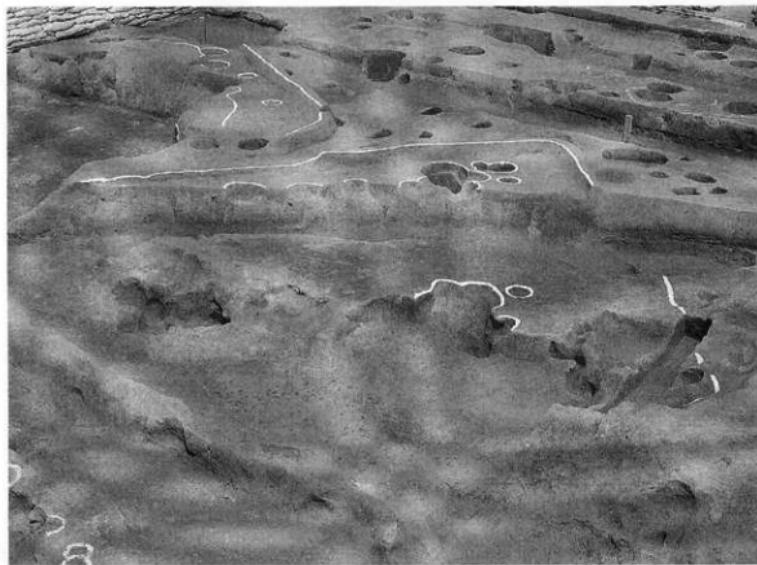
1 SC-27・28検出状況（西から）



2 SC-28完掘状況（南西から）



1 SC-27・28完掘状況（西から）



2 SC-27完掘状況（南東から）



1 CU13区粘土検出状況（北西から）



2 SC-29遺物・焼土出土状況（南西から）



3 北1区完掘状況（南西から）



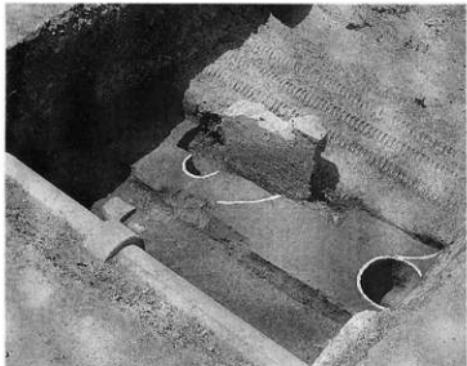
4 SC-29発検出状況（西から）



5 北2区完掘状況（南から）



6 北3区完掘状況（北西から）



1 南区発掘状況（南東から）



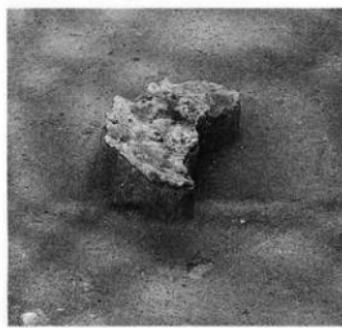
2 SP-443土層断面（北から）



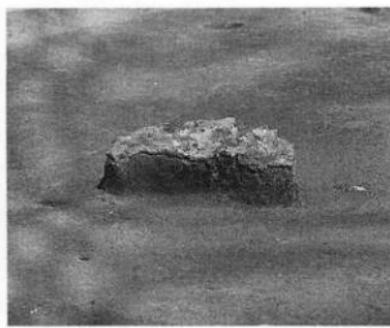
3 菊羽口（R37）他出土状況（北東から）



4 菊羽口（R37）他出土状況（南から）



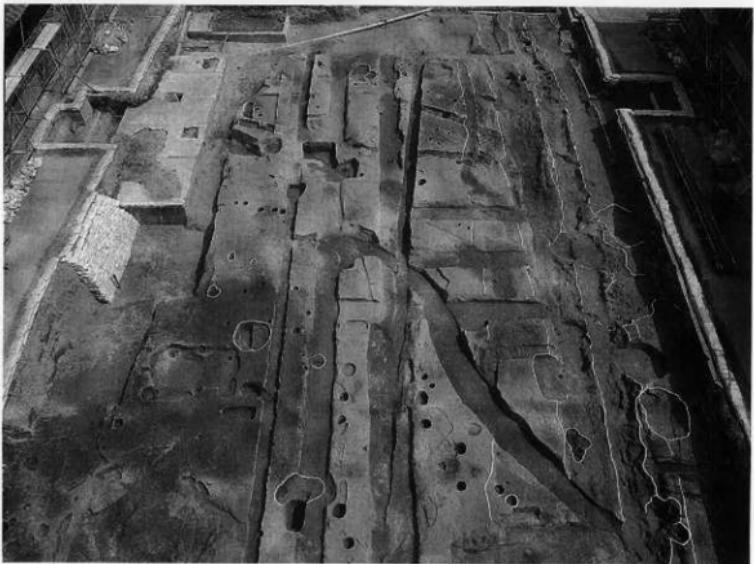
5 SX-22検出状況（北西から）



6 SX-22検出状況（南西から）



1 古代・中世面遣構検出状況（南東から）



2 古代・中世面遣構状況（西から）



1 SD-2 ウシ下顎骨 (R6) 出土状況(1) (西から)



2 SD-2 ウシ下顎骨 (R6) 出土状況(2) (西から)



3 SD-1～3 (Y=-67168) 土層 (北西から)



4 SD-1～3 (Y=-67156.2) 土層 (北西から)



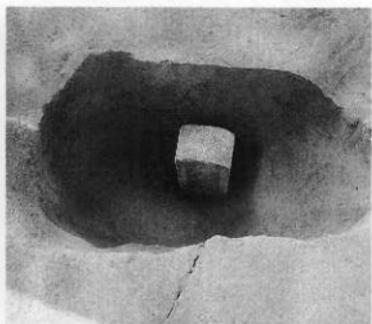
1 SK-9 土層断面（西から）



2 SX-15検出状況（北西から）



3 SX-13検出状況（北から）



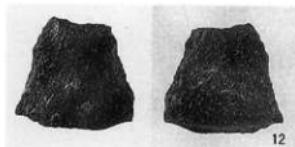
4 SX-17完壊状況（北から）



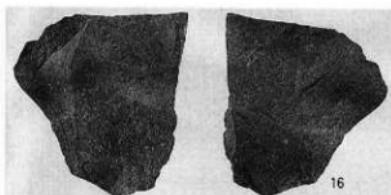
5 SX-19完壊状況（北東から）



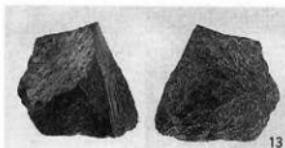
6 SP-130遺物出土状況（東から）



1 SC-35出土遺物(1)



2 SC-35出土遺物(2)



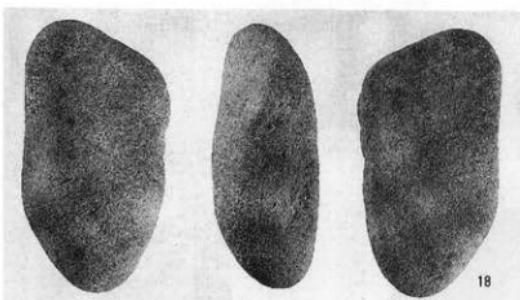
3 SC-35出土遺物(3)



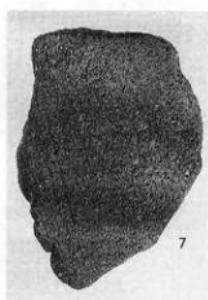
4 SC-35出土遺物(4)



5 SC-35
出土遺物(5)



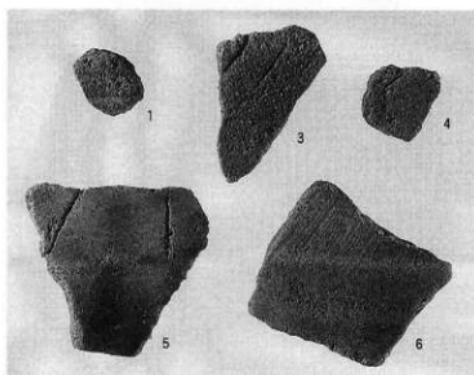
6 SC-35出土遺物(6)



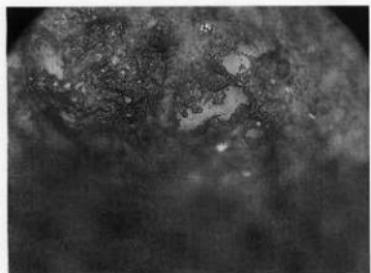
7 SC-35出土遺物(7)



8 SC-35出土遺物(8)



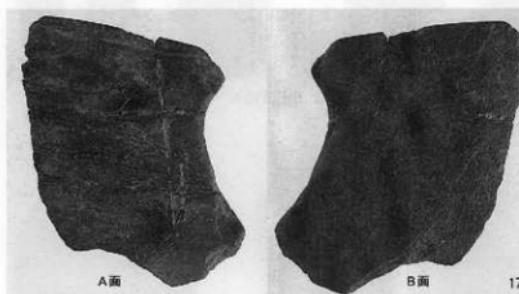
9 SC-35出土遺物(9)



A面挟み部使用痕 (×250)



B面刃部使用痕 (×250)

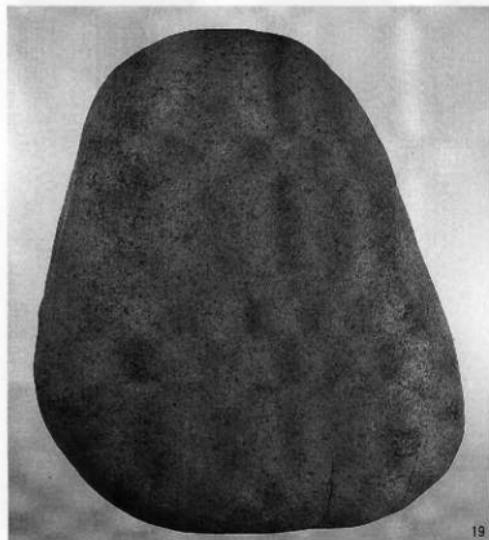


A面

B面

17

1 SC-35出土遺物⑩



19

2 SC-35出土遺物⑪



像1



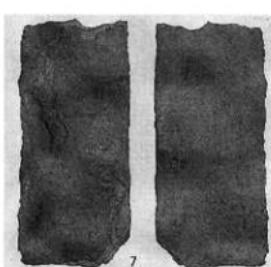
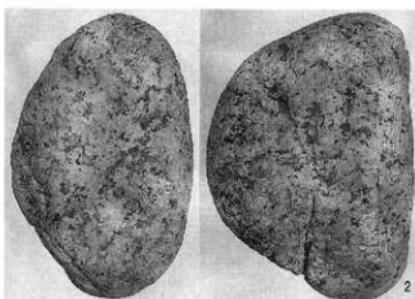
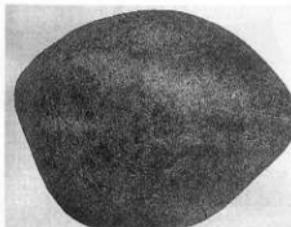
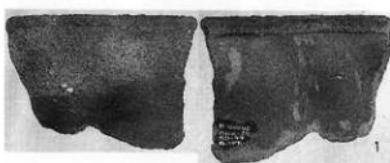
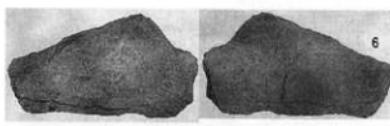
像2



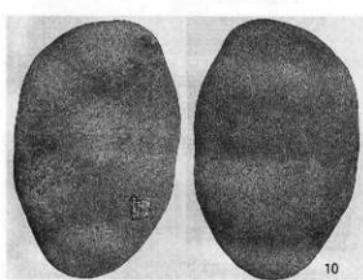
像3



像4



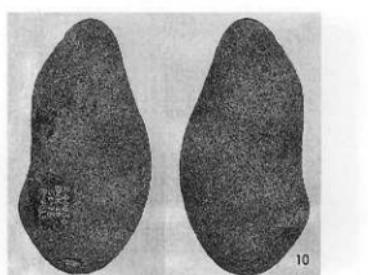
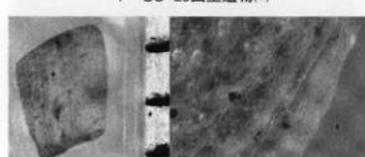
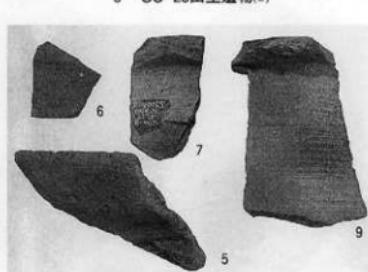
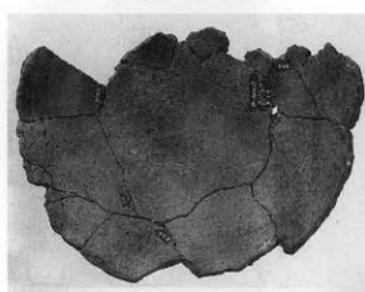
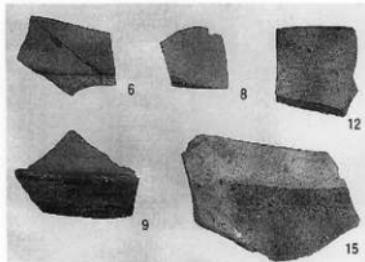
7 弥生時代柱穴(SP-377)出土遺物

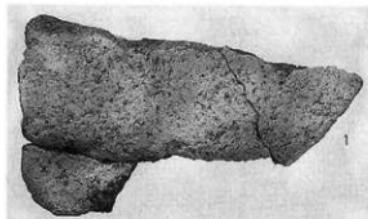


8 弥生時代柱穴(SP-422)出土遺物

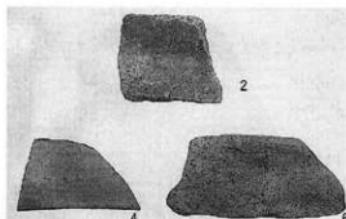
図版18

文京遺跡20次調査(18)

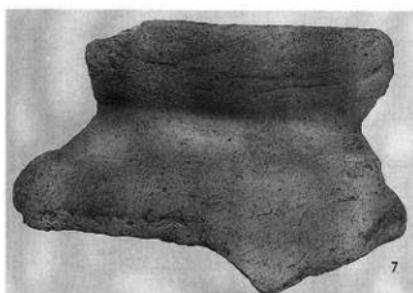




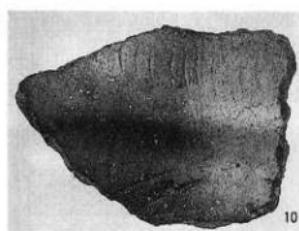
1 SC-29出土遺物(1)



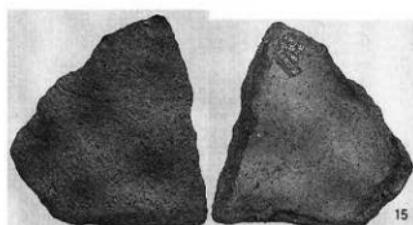
2 SC-29出土遺物(2)



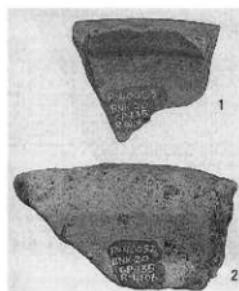
3 SC-29出土遺物(3)



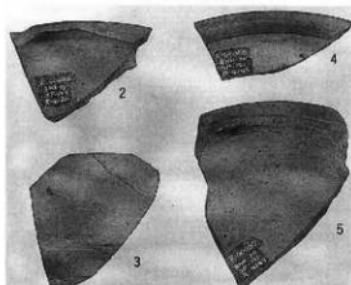
4 北1区III層出土遺物



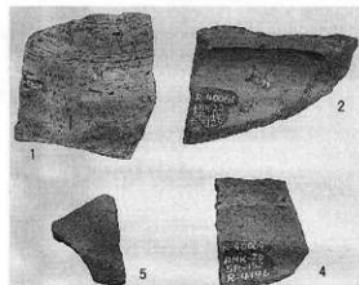
5 北1区搅乱層出土遺物



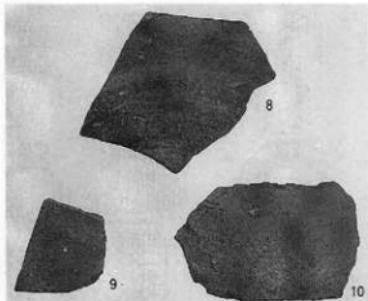
6 SB-67出土遺物



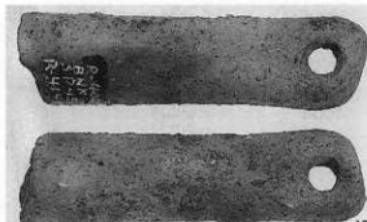
7 SB-69出土遺物



8 SB-70出土遺物



1 古墳時代柱穴 (SP-148) 出土遺物



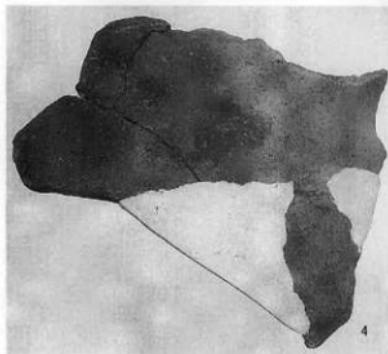
2 古墳時代柱穴 (SP-150) 出土遺物



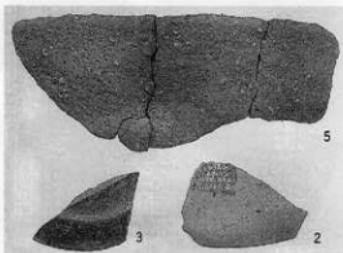
3 古墳時代柱穴 (SP-170) 出土遺物



4 古墳時代柱穴 (SP-189) 出土遺物



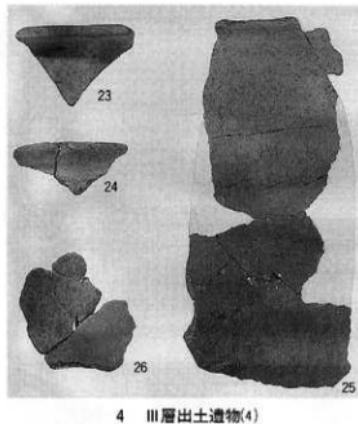
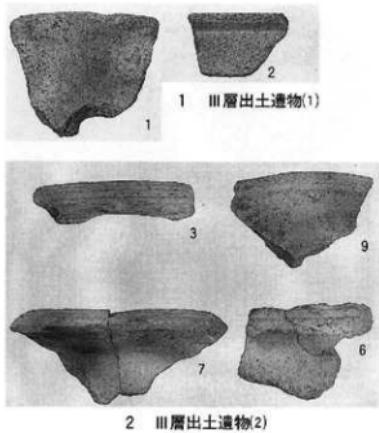
5 SC-23出土遺物(1)



6 SC-23出土遺物(2)

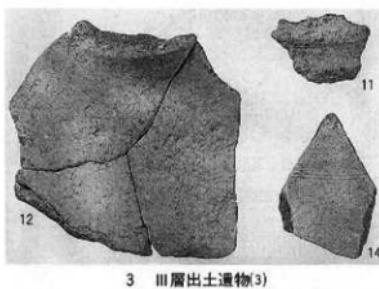


7 SC-23出土遺物(3)

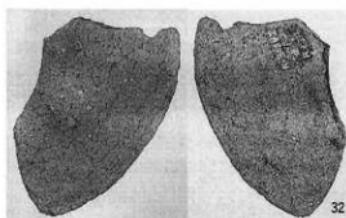


2 III層出土遺物(2)

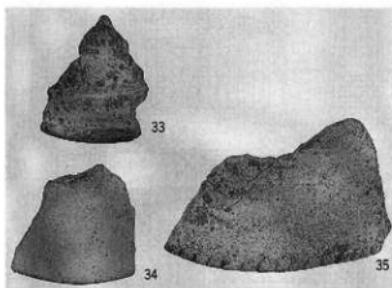
4 III層出土遺物(4)



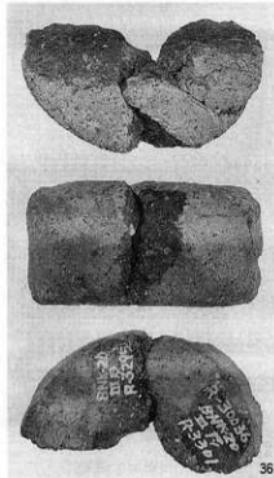
3 III層出土遺物(3)



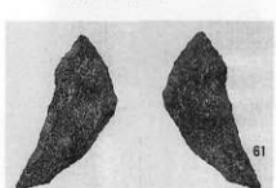
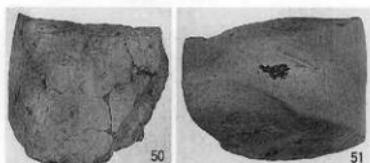
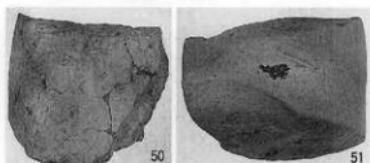
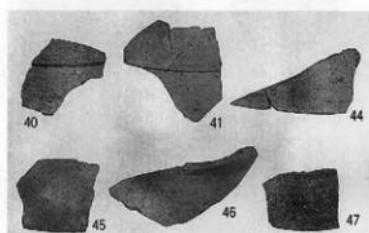
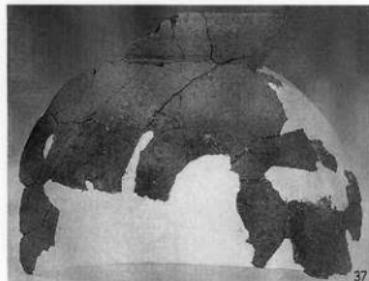
5 III層出土遺物(5)

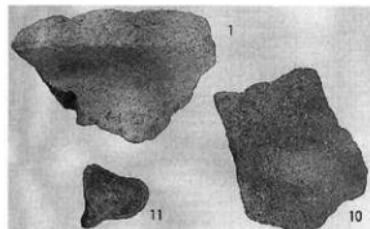


6 III層出土遺物(6)

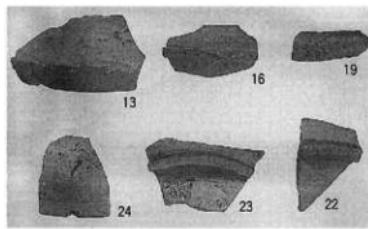


7 III層出土遺物(7)

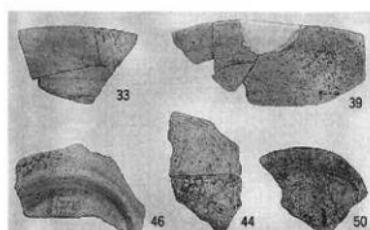




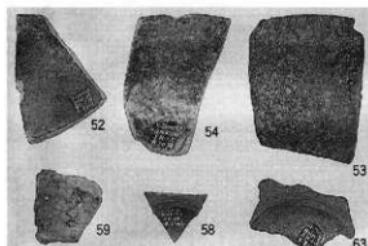
1 SD-1 出土遺物(1)



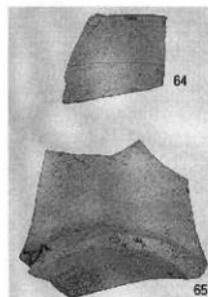
2 SD-1 出土遺物(2)



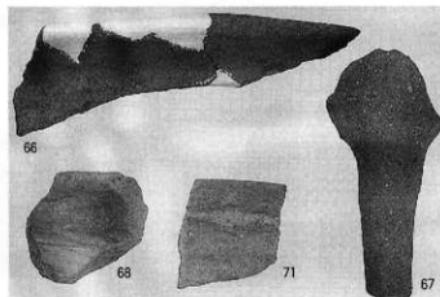
3 SD-1 出土遺物(3)



4 SD-1 出土遺物(4)



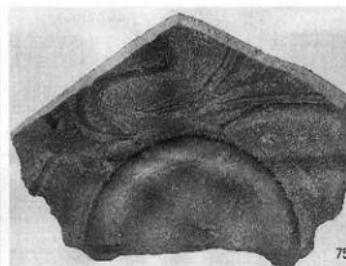
5 SD-1 出土遺物(5)



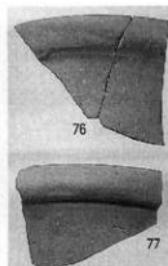
6 SD-1 出土遺物(6)



7 SD-1 出土遺物(7)



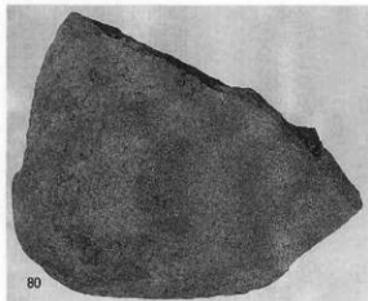
8 SD-1 出土遺物(8)



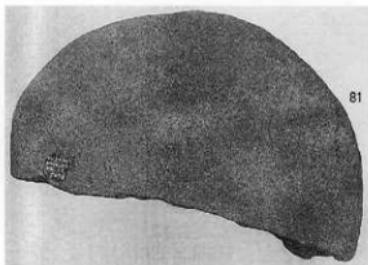
9 SD-1 出土遺物(9)

図版24

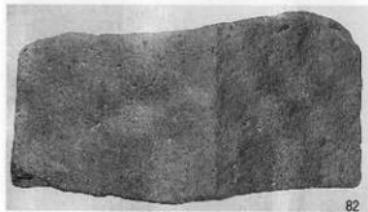
文京遺跡20次調査(24)



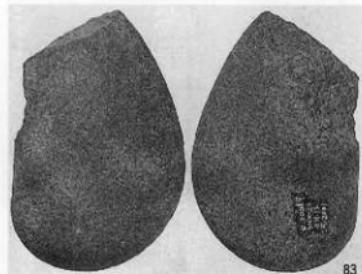
1 SD-1 出土遺物(1)



2 SD-1 出土遺物(2)



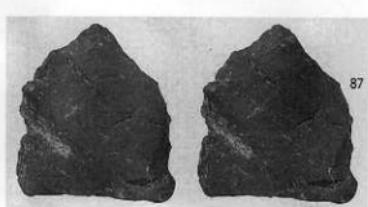
3 SD-1 出土遺物(3)



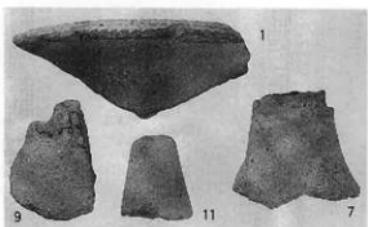
4 SD-1 出土遺物(4)



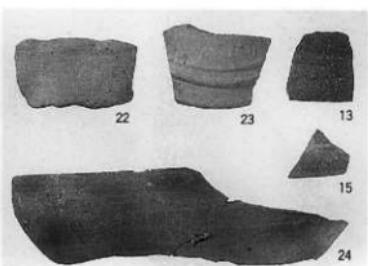
6 SD-1 出土遺物(5)



5 SD-1 出土遺物(6)



7 SD-2 出土遺物(1)



8 SD-2 出土遺物(2)